

大通公園を望む窓辺から

カミュの警告

常任理事 岡部 實裕

アルベール・カミュの「ペスト」(1947年)が世界的なベストセラーになっているという。まるで再興感染のようだと思いながら、日本でも1969年に発刊された訳本(新潮文庫)を書棚から探し出し手にしてみた。ナチスドイツに対するレジスタンス闘争に身を挺し、不条理の哲学者とも称されたカミュの「ペスト」、リウー医師が、封鎖されたオラン市(アルジェリア)を解放した寓話的ストーリーに心うたれた若き医学徒の頃を想い出した。読み直してみると、1665年のロンドンでのペスト大流行を題材にしたダニエル・デフォーの「ペスト」(1722年)を掘り起こし、分析したと推察される病状詳記や人間観の奥行きに感じ入った。

オラン市医師会長を説得する論理の進め方には「医の倫理のあり方」を感じるとともに、日本医師会の創始者・北里柴三郎先生が、19世紀末にイエールサンと同時にペスト菌をつきとめ、1943年にワックスマンがストレプトマイシンを見出したことにより感染防止対策がとられ、流行が抑えられた医学史へと想いをはせた。

1927年以降はペストの国内感染例はないとされている。しかし、世界的には近年でもペスト感染は続いている。WHO報告では、アフリカ諸国(マダガスカル、コンゴ民主共和国、タンザニア等)、アジアでも流行し、ベトナム、インド、ミャンマー、中国と、米国CDCが指摘する汚染地帯を中心にペスト菌は20数カ国で散発的な風土病として未だに生きながらえている。

カミュは、最終章で警告している。「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、……そしておそらくいつか、ペストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということ」。

医学というサイエンスの窓を通して見ても、73年前に発出されたカミュのものの見方や思考様式を学び、受容することが今こそ求められているのではないかと若々しく考えた。

コロナとポリオ

常任理事 伊藤 利道

ジョンソン英首相を治療したニコラス・ハート医師は「新型コロナウイルス感染症は現代ポリオだ」と表現しているそうです。新型コロナウイルス感染症から回復した後も肉体的、心理的な障害、認知機能に対する悪影響などが長期間残る可能性があるからだといいます。日本において、ポリオは昭和33年から36年にかけて爆発的に流行し、多くの麻痺患者を残しました。爆発的流行と後遺症という点で確かに似た点があるかもしれません。

昭和35年、我が国でのポリオ患者数は5,606人、死亡者319人でした。不活化ワクチン(ソークワクチン)による対策が強化されましたが、絶対数が足りませんでした。しかし、昭和36年になると流行が拡大し、全国的にワクチン接種希望の聲が高まりました。政府はソ連から「経口生ポリオワクチン(セービンワクチン)」を緊急に輸入し、6歳未満の者全員に公費で接種したそうです。その結果、昭和37年の患者発生数は289人と激変したそうです。このワクチンは日本では未承認であったため、安全かどうか議論になったそうですが、その時の厚生大臣は「平時にはやってはならないが、緊急時なのでワクチンを輸入し使用する、それは全て私の責任である」と断言したそうです。ある政治家(自民党元幹事長)は、この事を引き合いに出し、あらゆる責任は自分たちがとる、そのような決意の下にコロナ対策に挑み、新しい日本を作ると自派の会合で発言しております。幸い日本ではCOVID-19感染による死亡者は他国に比べ少ないですが、従来のやり方では、このやっかいな感染症をコントロールできないような気がします。

